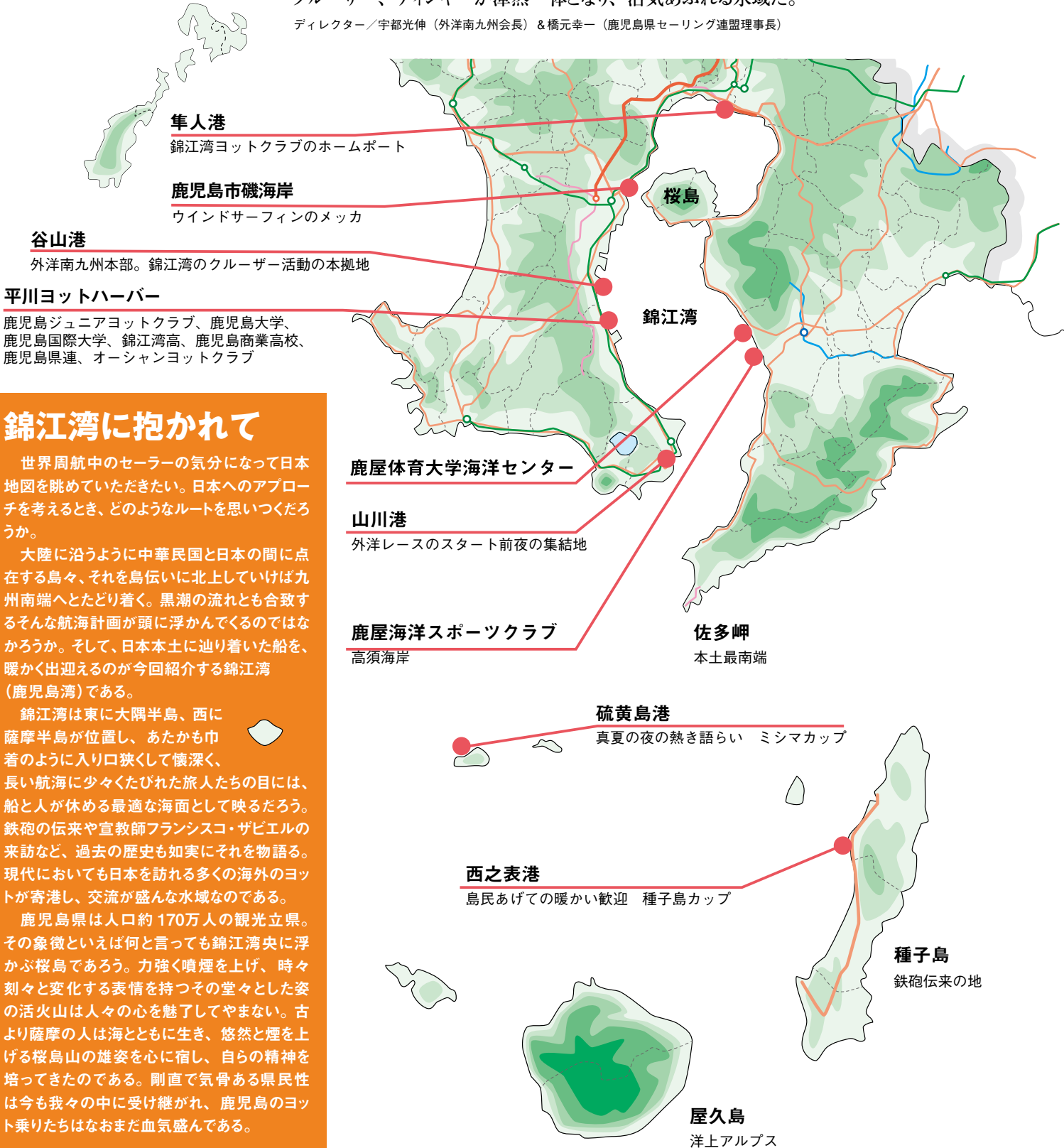


太陽と火山の国、鹿児島 映画「海の金魚」の舞台、錦江湾

地元セーラーのディレクションでお届けする本シリーズ。
今回は先ごろ公開された映画「海の金魚」の舞台となった鹿児島・錦江湾。
クルーザー、デインギーが渾然一体となり、活気あふれる水域だ。

ディレクター／宇都光伸（外洋南九州会長）& 橋元幸一（鹿児島県セーリング連盟理事長）



隼人港

錦江湾ヨットクラブのホームポート

鹿児島市磯海岸

ウインドサーフィンのメッカ

谷山港

外洋南九州本部。錦江湾のクルーザー活動の本拠地

平川ヨットハーバー

鹿児島ジュニアヨットクラブ、鹿児島大学、鹿児島国際大学、錦江湾高、鹿児島商業高校、鹿児島県連、オーシャンヨットクラブ

鹿屋体育大学海洋センター

山川港

外洋レースのスタート前夜の集結地

鹿屋海洋スポーツクラブ

高須海岸

佐多岬

本土最南端

硫黄島港

真夏の夜の熱き語らい ミシマカップ

西之表港

島民あげての暖かい歓迎 種子島カップ

種子島

鉄砲伝来の地

屋久島

洋上アルプス

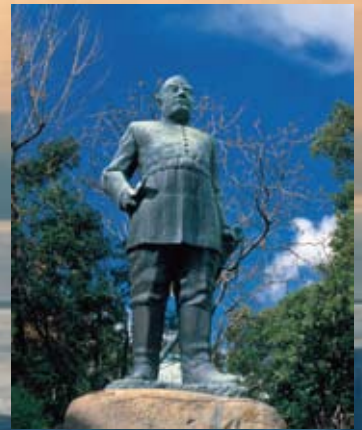
錦江湾に抱かれて

世界周航中のセーラーの気分になって日本地図を眺めていただきたい。日本へのアプローチを考えると、どのようなルートを思いつくだろうか。

大陸に沿うように中華民国と日本の間に点在する島々、それを島伝いに北上していけば九州南端へとたどり着く。黒潮の流れとも合致するそんな航海計画が頭に浮かんでくるのではなかろうか。そして、日本本土に辿り着いた船を、暖かく迎えるのが今回紹介する錦江湾（鹿児島湾）である。

錦江湾は東に大隅半島、西に薩摩半島が位置し、あたかも巾着のように入り口狭くして懐深く、長い航海に少々くたびれた旅人たちの目には、船と人が休める最適な海面として映るだろう。鉄砲の伝来や宣教師フランシスコ・ザビエルの来訪など、過去の歴史も如実にそれを物語る。現代においても日本を訪れる多くの海外のヨットが寄港し、交流が盛んな水域なのである。

鹿児島県は人口約170万人の観光立県。その象徴といえば何と言っても錦江湾中央に浮かぶ桜島であろう。力強く噴煙を上げ、時々刻々と変化する表情を持つその堂々とした姿の活火山は人々の心を魅了してやまない。古より薩摩の人は海とともに生き、悠然と煙を上げる桜島山の雄姿を心に宿し、自らの精神を培ってきたのである。剛直で気骨ある県民性は今も我々の中に受け継がれ、鹿児島県のヨット乗りたちはなおまだ血気盛んである。



鹿児島の象徴はこの人をおいてない西郷隆盛さん(写真提供/ (社) 鹿児島県観光連盟)

1

海洋民族の血が騒ぐ 外洋南九州

J S A F 外洋南九州の歴史は1981年にN-O RC 玄海支部の1フリートとして始まりました。

わずか3艇、50余名の小所帯でしたが、メンバーの心意気は大変に高く、県外の外洋レースにも積極的に参加し、その活動を広げてきました。その後、鹿児島でも外洋レースを行いたいとの思いが自然に芽生え、88年には国際火山会議を記念した「鹿児島カップヨットレース」が開催されました。このレースは皆さんご存知の「火山めぐりヨットレース」として毎年夏の恒例行事となり、今に至るまで続き、毎回50～60艇の白いセールが桜島をバックに帆走する様子は圧巻です。さらに90年にはミシマカップヨットレースが始まり、こちらも現在に至っています。

レースだけではなく、海洋民族の血が騒ぐのか、白い帆という羽を得た「ほっけもん」たちは外へ、世界へとほばたき、多くの鹿児島のセーラーたちが大海原へと旅立って行きました。

中でも92年、女性初の単独無寄港世界一周を果たした今給黎教子さんの快挙には私たちセーラーはもちろんのこと鹿児島県民みなが誇りと

し、おおいに讚えたものです。当時から会の活動としてセーリングスポーツの周知、啓蒙活動などにも意欲的に取り組み、一般試乗会やセーリング体験会なども行っていましたが、この快挙で鹿児島では一気にヨットが市民権を得たような印象でした。

南九州フリートはその後会員数も順調に増え、93年に20艇、50余名の勢力をもって念願の支部昇格を果たし、J S A F 加盟外洋南九州として今日に至っています。

2006年には種子島カップヨットレースが始まり、前述の火山めぐりヨットレース、ミシマカップヨットレースとあわせ鹿児島トライアングルレースと称され、定着した活動となっています。この3大レースのほかにも平均月1回以上の頻度で錦江湾内のフリートレースを行い、会員間の親睦や技術の向上を図っています。今後も暑い太陽と風を受け、ホットに活動を続けようと鹿児島の外洋ヨット乗りたちはますます元気です。

(宇都光伸/J S A F 外洋南九州会長 <http://www.jsaf.or.jp/m-kyusyu/>)



J S A F 外洋南九州の本部、そして錦江湾のクルーザーの本拠地となる谷山港



278日間をかけて日本女性初の東回り単独無寄港世界一周を果たした今給黎教子さん

種子島カップヨットレース

5月ゴールデンウィーク前半に開催。山川沖をスタートし西之表港をフィニッシュとする約35マイルのオフショアレース。種子島島民あげての歓迎が嬉しい。

今年の種子島カップヨットレースのポスター。今年は5月1日に開催



鹿児島カップ火山めぐりヨットレース

7月の海の記念日を含む前後6日間で開催。インショア2本、オフショア1本の3レースの総合成績を競う。県内の最大のクルーザーレース。

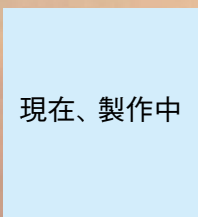
今年の火山めぐりヨットレースのポスター。7月16日～21日に開催



ミシマカップヨットレース

8月の第一土曜日、山川沖スタートし硫黄島沖フィニッシュの25マイルのオフショアレース。牛一頭があたる抽選会はあまりにも有名。

今年は8月〇日に開催されます。まだ、エントリーは間に合います



3

まだ、エントリーはできます。 鹿児島トライアングル 外洋ヨットレース

青春まっただ中！ 映画「海の金魚」の舞台



青春ヨットムービー「海の金魚」の1シーン（写真提供/C 2010「海の金魚」製作委員会）

2009年夏、雑賀俊郎監督のもと、映画「海の金魚」の撮影が行われた。ヨットを題材にした高校生たちが織りなす青春映画。多感な高校生たちが心の葛藤に苦しみ、それを乗り越えながら明るい明日を見つけて前に進んでいくという内容のこの映画。日本映画としてここまでヨットが使われるのはおそらく石原裕次郎氏の「太平洋一人ぼっち」、昨年公開の「ジャイブ」に続いて3作目だろう。

監督の「ヨットを通して若者に夢を与えたい。そしてこれを見た若者たちにヨットへの憧れを持たせ、自分もいつか乗ってみたい、と思わせるような映画にしたい」という意気込みに共鳴し、鹿児島ヨット界総力挙げての撮影協力となった。

ぎらぎらとした真夏の太陽の下、09年7月から8月にかけての35日間撮影に協力したが、当然ながら自然相手の撮影が多く、1日として同じ風、同じ潮なく、その大変さは想像以上であった。さらに追い打ちをかけたのが桜島の火山灰。ヨットのデッキが灰まみれでは画にならないし、またカメラなどの精密機材にも灰は大敵で、撮影中止を余儀なくされることしばしば。それでもどうにかクランクアップにこぎつけた。映像を通してヨットの魅力、錦江湾の雄大さを少しでも伝えることができるだろうか。公開が不安でもあり、楽しいなことでもある。（「海の金魚」公式サイト <http://www.umikin.com>）



錦江湾ヨットクラブが主催する単人ピアカップヨットレース。レースに併せ、ヨットの体験試乗も行っている



同じく錦江湾ヨットクラブが主催する松山杯ダブルハンドヨットレース

2

創立 30 周年を迎えた 錦江湾ヨットクラブ

「花は霧島～たばこは～国分 燃えて上がるはオハラハー桜島～」と歌われた、まさに霧島連山から眼下に広がる海が活動拠点の隼人である。

海好きな大人が8人集まりY15とJOG IIの2艇を鹿児島湾奥の隼人の海に浮かべたのが1979年6月のこと。当初はまだ「始良（あいら）セーリング同好会」として楽しんでいたのだが、同年8月に行われた「第1回加治木カップ」を契機に第1回総会が開催され、クラブの名称を「錦江湾ヨットクラブ」と改め正式に活動を開始した。その後年々ヨットの数もクラブ員も少しずつ増え、最盛期にはクルーザー16艇、ディンギー7艇、クラブ員50名を超える大所帯へと変貌して行った。

その活動は地元レースの参加のみならず、97年 SAIL OSAKA、99年 釜山レース、同年 KING' S CUP（ブーケット）、2000年 ハウステンボス カップなどに混成チームを結成し参加、活動の幅を広げた。その一方、月に1度のクラブレースをはじめ、市民参加型のレースや外国人（留学生の外国語指導助手）を招いての国際親善レースを開催するなど地域に密着した活動も行っている。

09年1月には創立30周年の記念式典を開催し、これまでの足跡を思うに感無量であった。現在はクルーザー10艇、クラブ員30名余りで活動しているが、徐々に減少傾向にありクラブ員一同、懸命に努力しているが会員増加はなかなか難しく、寂しい思いをしている。（松山誠也/錦江湾ヨットクラブ会長）

鹿児島県連と錦江湾

海図には鹿児島湾と記されているが、地元では誰もが錦江湾という。

湾の入り口は狭く、中に入ると太古の昔激しい火山活動によって生まれたカルデラで形成され、湾口から湾奥まで約80km、幅の広いところで約20km、水深は最も深いところで約200mもある。

湾口には薩摩富士ともいわれる開聞岳、湾奥には天孫降臨の地霊峰高千穂峰をはじめとする霧島連山、そして、湾中央の鹿児島市街地の目前に雄大で今なお火山活動を繰り返している世界でも有数の活火山「桜島」があり、東洋のナポリと称され風光明媚を誇る。

この「錦江湾」が鹿児島のセーラーの活動拠点である。

鹿児島のヨットの歴史は、1961年熊本国体

のヨット競技が鹿児島市鴨池海岸において開催されたことにより一気に拡がりを見せ、活動が始まった。

その後、72年に鹿児島で「太陽国体」が開催されるにあたり、ヨットハーバーが現在の平川へと移転し、ここを拠点にさらに活発になった。平川は湾の幅が広い場所にあり、離島航路や貨物船などの航路から遠く離れて安全にセーリングを楽しめる場所である。

また、平川の対岸大隈半島側の鹿屋地区に鹿屋海洋スポーツクラブ、国立鹿屋体育大学が創設され、ヨットの部活動が面的に広がった。

さらに、88年から鹿児島市と県連がタイアップして市民を対象としたディンギーヨット教室と体験帆走を毎年実施し、錦江湾の素晴らしさを知ってもらう機会を作った。なんと、この20年間で一般とジュニアヨット教室の受講生が約1千人、体験帆走は1万人を超える人々が錦

江湾でヨットと海の自然を楽しんだことになる。県連50年の活動成果として、72年太陽国体での総合優勝をはじめ、ウインドサーフィン級のナショナルチーム入りを果たす選手、世界選手権に出場する選手、そして国内では全日本実業団、インカレ、インターハイなどでも優秀な選手を輩出してきた。

一方、クルーザーとのかかわりも県連として大きな役割でもあった。22年前、世界で初めて鹿児島で開催された「国際火山会議」を契機に始まった「火山めぐりヨットレース」は桜島から南西諸島の火山群を廻るクルーザーレースとして広く知られるようになったが、外洋南九州へバトンを引き継ぐまでの20年間、企画・運営などを主体的に担って鹿児島の海洋観光発信に大きく貢献してきた。(橋元幸一／鹿児島県セーリング連盟理事長 <http://www.5e.biglobe.ne.jp/~que4431/ksaf/>)



救助艇を準備する子どもたち



今年3月に行われた九州OP級ウインターカップの1シーン



15年前に開催された全日本少年少女オープンヨット大会。後方に見える桜島フェリーに見守られながらのレースだった

4

活気ある楽しい平川ヨットハーバー

「おぎーす」今日も元気なジュニアセーラーのユーモラスな挨拶で休日の朝が始まる。十数人のジュニアヨットクラブだが皆に元気をくれる。おとなしい高校ヨット部2校の生徒や、中・高年セーラーのオーシャンヨットクラブ、実業団クラブ、時々出艇する大学2クラブなど幅広い年代層の人々が平川で活動している。

穏やかな、波の少ないのが特徴の海面へ繰り出し、グループごとにエンジョイセーリング？ レーシング派は練習を重ね、のんびり遊び派は、1年中海を楽しめる南国鹿児島の海洋天国で海のピクニックを満喫している。

鹿児島はほどよく田舎であるが、ヨット人口は意外に多い。なかでもディンギーのJSAFメンバーの登録数は約160名とこのところ大きな変

動なくキープしている。年間10レースほどのローカルレースが実施されるが、艇種ごとの出艇数が一桁台と少々さみしいところもある。そこで、九州水域の各大会へはなるべく参加し、スキルを上げているところである。一方、全国大会への参加となると、さすがに地の不利を実感する。しかし、これらを克服しこれまで多くの選手が育ってきた。今年のナショナルチーム選考レースには平川で育ったOB3名が挑戦し、1名がJSAFナショナルチーム入りを果たした。今後も古いながらも、この平川ヨットハーバーから、夢が広がることを期待したいものである。しかも、これまで同様「安全に」！



映画「海の金魚」のディンギーシーンのロケ地にもなった平川ヨットハーバー



平川ヨットハウスの中にはさまざまなレースの表彰状が壁面いっぱいには貼られている



鹿児島オーシャンヨットクラブの初心者ヨット教室でティラー操作を学ぶ受講生



沈起こしの練習もします

鹿児島市平川ヨットハーバーを拠点にする一般社会人のクラブです（会員53人）。噴煙たなびく桜島を遠景に臨む鹿児島湾という絶景のロケーションの中、毎週日曜日、デインギ（スナイプ、シーホッパー）によるコース練習やレース、クルージングなどを楽しんでいます。鹿児島市の所有艇と県セーリング連盟の指導をもとにしたユニークな形態のクラブです。

鹿児島市は1989年にスナイプを購入し、市民を対象にしたヨットの「体験帆走」と「初心者ヨット教室」を始めました。当時、鹿児島は今給黎教子さんが太平洋横断に成功するなどヨットでも有名になり、県民の関心も高まっていました。また、美しい鹿児島県の自然を生かして海洋性スポーツをはぐくむには絶好の条件がそろっていることから、海洋性スポーツの振興に努めたいということから、実施されています。

ヨット教室受講生が設立 鹿児島オーシャンヨットクラブ

5

鹿屋海洋スポーツクラブ（B&G 鹿屋海洋クラブ）は1992年に発足。鹿屋体育大学開催の公開講座を受講した人たちがヨットを続けたいと集まり活動を始めました。活動場所は大隅半島の真ん中位置にある鹿屋市高須海岸で、夏は南風、冬は北西風がよく吹き、西に開闢岳、北に桜島を見ながら、温暖な気候と恵まれた環境の中でジュニアからシニアまでの多くの会員が年間を通して楽しくセーリングをしています。

近くには鹿屋体育大学があり、ヨット部やウインドサーフィン部の学生たちと同じ海で活動し、鹿屋体育大学とお互い協力し合いながら大会やイベントを開催しています。

鹿屋市は「健康・交流都市かのや」として、スポーツ大会やイベントを積極的に開催しており、夏にはマリIFESTAを開催し、多くの市民の方がマリンスポーツを楽しむ機会があり、本スポーツクラブも協力しています。

鹿屋海洋スポーツクラブからは国体選手やジュニア世界大会へ出場する日本代表選手も輩出しています。徐々にクラブ員が減少していますが、今後も頑張って積極的に活動していきたいと思えます。（坂口陽平／鹿屋海洋スポーツクラブ事務局）

7

日本代表選手も輩出 鹿屋海洋スポーツクラブ



2010年度ナショナルチーム選考レースのベースとなった鹿屋海洋スポーツクラブ

6 研究活動の拠点 鹿屋体育大学 海洋スポーツセンター



鹿屋体育大学海洋スポーツセンター

こうして始まった第1回の初心者ヨット教室の受講生の有志が「もっとヨットを楽しみたい」とクラブを結成し、30人でスタートしたのが当クラブ。ヨット教室を終了すると誰でも入会できるという「敷居」の低さもあって、毎年、新しい仲間が加わり、一時は90人に膨れ上がりました。

年間の活動計画のなかには、夏の鹿児島湾横断桜島一泊クルージングというスペシャルメニューもあります。「体験帆走」「ヨット教室」ではインストラクターを、火山めぐりクルーザーヨットレースでは運営のお手伝いをしています。福岡県のクラブとの県外交流がつづいています。

クラブ結成22年目で艇の数も増えました。本部船兼救助艇は自前で買いそろえるなど、「安全第一」をモットーにますます充実したクラブ活動を目指しているところです。（寺師慶志／鹿児島オーシャンヨットクラブ一期生）

鹿屋体育大学の学内共同教育研究施設として1987年に開設し、海洋スポーツに関する理論教育・実技指導及び研究活動を行うほか、講習会の開催、課外活動等に活用しています。

授業科目に海洋スポーツ（ヨット、ウインドサーフィン、カヌー、ダイビング）を取り入れるなどの特徴を持っています。

課外活動ではヨット部、ウインドサーフィン部が活動しており、全日本学生選手権などで徐々に成果が表れてきています（08年スナイプ級優勝、09年女子インカレスナイプ優勝）。また、シングルハンド種目の活動にも力を入れており、レーザ級級の安田選手、ラジアル級の高橋の2人が10年ナショナルチームに入りました。さらに近年の傾向としてJSAF強化スタッフや高校ヨット部の顧問として活躍する卒業生も増えています。専門的に体育学を学んだ知識や経験を基に、個々に特徴をもって実践の場に入り込んでいくことは新たな大学ヨット出身者として活躍の場であるといえるでしょう。

年間を通して風に恵まれ、温暖な気候と水温が魅力で、ナショナルチームのトレーニング拠点としても実績を積んでおり、その延長で今年のナショナルチーム選考会を開催できたことは大きな一歩でした。今後のより良い形を求め発展させていきたいと考えています。（榮樂洋光／鹿屋体育大学海洋スポーツセンター助教）



地域密着を目指して大学長杯オープンヨットレースを開催